

Title	第三世界からの西欧精神医学批判者F. ヒックリングの軌跡
Sub Title	F.W. Hickling, the Jamaican innovator in transcultural psychiatry : toward psychohistoriographic cultural therapy and Jamaican polymerized corporeality
Author	宮坂, 敬造(Miyasaka, Keizo)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2024
Jtitle	慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要 : 社会学心理学教育学 : 人間と社会の探究 (Studies in sociology, psychology and education : inquiries into humans and societies). No.97 (2024.) ,p.[77]- 85
JaLC DOI	
Abstract	This research note focuses on the work of the late Jamaican psychiatrist F. W. Hickling, who developed a novel psychohistoriographic cultural therapy (PCT) uniquely oriented toward Black Jamaicans. Hickling is less well-known in medical and psychiatric anthropology in Japan. For the sake of these readers, this note includes brief biographical materials and insights drawn from the author's interviews with him. To briefly discuss the development of Hickling's PCT as a unique non-European third world approach (taking a decolonialist Black Jamaican approach) to psychiatric art therapy, this note discusses Hickling's biography, important prior influences, including his work as a stage manager for the Third World Band, and the incidents taking place in the 1977 turning point in Hickling's career, allowing us to understand the development of his psychiatric therapy as a result of the synthezation of his multiple commitments to a variety of social and artistic activities and, accordingly, from his cultivated networks of influence in the Afro-Caribbean people surrounding him, all of which led to his culturally polymerized corporeality approach.
Notes	研究ノート
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000097-0077

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

第三世界からの西欧精神医学批判者 F. ヒックリングの軌跡
F.W. Hickling, the Jamaican Innovator in Transcultural Psychiatry:
Toward Psychohistoriographic Cultural Therapy and Jamaican
Polymerized Corporeality

宮 坂 敬 造*

Keizo Miyasaka

This research note focuses on the work of the late Jamaican psychiatrist F. W. Hickling, who developed a novel psychohistoriographic cultural therapy (PCT) uniquely oriented toward Black Jamaicans.

Hickling is less well-known in medical and psychiatric anthropology in Japan. For the sake of these readers, this note includes brief biographical materials and insights drawn from the author's interviews with him.

To briefly discuss the development of Hickling's PCT as a unique non-European third world approach (taking a decolonialist Black Jamaican approach) to psychiatric art therapy, this note discusses Hickling's biography, important prior influences, including his work as a stage manager for the Third World Band, and the incidents taking place in the 1977 turning point in Hickling's career, allowing us to understand the development of his psychiatric therapy as a result of the syncretization of his multiple commitments to a variety of social and artistic activities and, accordingly, from his cultivated networks of influence in the Afro-Caribbean people surrounding him, all of which led to his culturally polymerized corporeality approach.

キーワード：心理歴史誌的文化療法 (PCT), ジャマイカの黒人精神科医フレデリック・W・ヒックリング医博, 脱植民地視座からの西欧精神医学批判, 理由付けサークル

1. はじめに

本稿では、筆者が3回にわたって集中的にインタビューする機会をもったジャマイカの黒人精神科医フレデリック・W・ヒックリング医博（以下、同医博またはFWHと表記）について論じつつ、彼の〈心理歴史誌的文化療法〉psychohistoriographic cultural therapy（以下、PCT）への歩みについて、筆者が直接対面で知りえた範囲で重要事項を記し、PCTの成立までには演劇・音楽活動や地域精神医療の確立を含むFWHのさまざまな関与とジャマイカ・カリブ海圏の人々の出会いがあり、それらが濃縮したものがPCTであった点を確認してみたい。本稿の議論によって、PCTを単にジャマイカ色はあるもの

* 慶應義塾大学および東京通信大学名誉教授

の芸術療法を借用した心理療法とする理解方法の瑕疵が判るであろう。

2. ジャマイカの文化精神医学革新者 F. ヒックリングの歩みの背景

同医博の主著と百篇あまりの論文が扱う領域は精神医学研究が主ではあるものの、かなり広い—実験群統制群に分かれた患者多数事例と患者による回答パターンや診断症例内容を集め、多変量統計分析した狭い意味での精神医学論文も少なくない。ただそれだけではなく、反白人西欧植民地主義の思想をバネにしたジャマイカの歴史通観、黒人系下層中層民の主体思想の宿しをみる大衆演劇論、ラストファリ宗教運動の分析、ジャマイカ黒人の真のアイデンティティ確立・解放を導く PCT や〈心理歴史誌的短期心理療法〉、子どもの教育への PTC の応用による将来世代の主体形成 [dream a new world]、ジャマイカ黒人系に多く精神病をみだしていた西欧的精神医学的性格論・人格障害検出の性格検査への根底的批判と、それに代替するジャマイカ黒人系の人格を真にとらえうる性格検査の独自開発、西欧精神医学の欠如相の実地検分的比較研究、ジャマイカ精神医学教育の改革など、広範囲にわたる多々の論文がある¹⁾。

これらを通覧・通読すると、同医博が、精神科病院に入院したジャマイカ黒人系の患者の心のくびきからの解放を願い、社会精神医学的治療実践（のちには文化精神医学的实践）に 50 年の長きにわたって歩んできた姿に心を打たれる——300 年以上の人種差別と 200 年あまりの植民地支配の受難の歴史を被ったジャマイカの土地においてアフリカ系カリビアンが歴史的に蓄積している心の傷を解き放ち、真に社会的に自律しうる自己獲得のためのジャマイカ流精神医学の力強い開拓の道行きが一貫してみられるのである—同医博の終生の課題追求の情熱を感じ、讃歎の念をいただくのみである—2020 年 5 月 7 日、残念ながら同医博は死去されたのだが（筆者が参加した同医博個人クリニック会場での第 2 回〈心理歴史誌的文化療法〉実習セミナー CARIMENSA 主催 Psychohistoriographic Cultural Therapy Workshop “Decolonizing Psychotherapy: The Application of Psychohistoriographic Cultural Therapy.” [ジャマイカ以外からの参加者を受け入れたのは初めてのことであった] から 3 ヶ月経っていなかった）……。

とはいうものの、著作や論文だけの通読からは、ジャマイカの文化精神医学革新者黒人系精神科医 FWH の実像が十分みえてこない面がある。新たな心理療法 PTC についても、論文だけの読書と、実習に参加してみてもイメージの実像の密度が異なっている。そして、FWH 本人と接し、生活史の一コマを問わず語りに語っていただき、ひととなりの印象をつかんだ上で、はじめて読解によって至った概念枠を超える沃野が開けてくる印象がある—そうしてはじめて、この人物の生の力の所在が感じられてくるのもたしかである。こうした部分を筆者が感得しえたので、本稿の紙幅の範囲でその一端を示すことには一定の意義があると考えた。

FWH は、第二次世界大戦中の 1945 年に、キングストン郊外で生まれ、英国植民地独立後ジャマイカ共和国となった 1962 年前後から、医学生としてインターン・臨床実践の途への歩みをすすめ、精神医学専修を行っている。英領ジャマイカ時代、母方祖父も父も黒人奴隷出自とはいえ高等教育をうけ、父は自由黒人として植民地公職勤務、黒人系の母は当時黒人では唯一の演奏会ピアニストであった。FWH は比較的ゆとりのある家で育ったといえるが、ジャマイカ独立前の緊張状態下で植民地憲兵隊が往来を多数往復警戒していたときの衝撃の経験を語った。キングストンの兵隊駐屯所近くにあった自宅付近で、たまたまグラマースクール学校で一緒だったことのある白人憲兵から殴られかかり、一目散に往来を駆け出して逃げおおせたのであった。

FWH が実際の医療を行った初期の時代は、ジャマイカ独立後の改革の時代であった。さらに米国（1969 年 ECFMG [外国人医学士教育研修]）および英国での臨床教育研修の機会をえた [Diploma in Psychological Medicine, Royal College of Physicians, London and Royal College of Surgeons, 1972. Membership, Royal College of Psychiatrists (MRCPsych), UK, 1973]。英国での研修は成功したものの、当地では市井の英国人から受けた人種差別的態度には非常に怒りを感じたということであった。

1970 年までは、外科医として務めたが、1971～72 年は大学精神医学科の学監から始め、1973 年～1976 年には ベレヴュー病院 Bellevue Hospital での相談者精神科医、以後 1983 年まで、同病院で主席精神科医務官を務めている。なお、この病院は 1938 年までは、ジャマイカ精神異常病院 Jamaica Lunatic Asylum と呼ばれ、それ以降は、ジャマイカ精神病院 Jamaica Mental Hospital に改称され、1946 年からは、Bellevue Hospital と再度改称されたが、ジャマイカで唯一とっていい精神科専門病院であった²⁾。

この時期が、FWH が後に PCT として定式化される前身の、社会劇作成上演による集団療法の開拓過程で重要な時期となった。同医博がダンス、歌唱、詩作の趣味を総合的に活用した大衆演劇におおに関わり—1960 年代を通して各種演劇祭で舞台主任として 1978 年まで活躍していたし、1963 年から 1977 年まで、ジャマイカ国立舞踊劇場団 National Dance Theatre Company of Jamaica に関わり舞台主任として重要な役を演じていた—、それが 1978 年ベレヴュー病院で実施した社会劇すなわち〈竹劇場〉Bamboo Theatre [軽い竹材の仕切り壁を配した庭劇場 Garden Theatre] 上演の試行開拓に強い相乗作用を発揮していったのである。作業療法や農業訓練作業等、それぞれ別に行われていた作業療法も、FWH により〈竹劇場〉に連関され総合的な療法のなかに付置づけられるようになった。また、患者が「苛立ちバンド」という名の音楽バンドをつくり、劇のなかや前後で演奏したりするようになるが、同医博もときたまサキソホンを抱えて演奏に加わっている。直前まで〈第三世界バンド〉the Third World Band の国内外の活動を舞台主任として支え、このバンドの複数のメンバーが分裂することなく創造力を維持開拓するグループダイナミクスを FWH は編み出していったのだが、それがまさに、reasoning circle の討議過程を活性化させるという方法であった。この方法を、病院内スタッフに患者を交えておこなう院内会議と竹劇場等の患者と医療スタッフ合同の活動過程にも適用していったのだが、1977 年が FWH の新しい精神医学的集団療法と院内関わり過程の創造・創発への転換点となっていく。こうした経過の中で、理由付けサークルの概念‘reasoning circle’を同医博が提示し、医療従事者に加えて患者も会合に加わり、一緒に治療作業課題を評価し議論していく〈理由付けサークル〉過程が重要視されたのだ。同病院内で、Cultural Therapy Centre が設立され、そこには、正規看護師というより看護助手や精神医学的支援者等がこぞって主力となり、また、演劇学校の生徒等、PCT に参加推進する協力者が参集した。

こうした諸過程を経て、患者がまだ高度の医療サポートが必要なのか、もっと少ないサポートでもやっていけるのか、そのリハビリテーションの必要度合いがその都度議論され、もし一番よいレベルとされるなら、完全退院し家族と地域のケアだけに委ねることになる。こうした一連の過程の開拓実践により、病院外の劇の聴衆や劇関係協力者にも患者が係りをもちえ、その積み重ねで地域コミュニティが形成され、未来にむけるアイデンティティ確立をなしえる患者の回復と社会参加が実現されるよすがが生まれていった。ずっと長く病院に入所していた患者が数年内に回復していく姿が実感された—ここら辺になると、フランスでフェリックス・ガタリやジャック・ウリが提唱実践していたラポルド病院での精神医療と「コレクティブ」の概念のことが思い出される³⁾。FWH も R・D・レインらの反精神医

学のこと等、西欧内部での精神医学改革の試みに注目していたと思われるが、同医博の基本は、黒人系ジャマイカ人の負の歴史を逆転する精神医療という、ジャマイカの土地と人々に根付いた文脈からにじみ出た風土と身体の実存にある。とはいえ、精神医療改革の試みは集団過程の改革・転換にあるわけなのであった—そこにシステムとしての編成の様相が不可避な以上、同医博とジャック・ウリ等の試みに本質的なところで通い合う局面が存在するのかもしれないことであろう—本稿ではこの点について踏み込んで検討せず、別稿の課題とする。

こうして 1978 年から 1981 年までの期間は、主として子どもを招き、一種の実地教育の場として Bamboo Theatre を観劇してもらうなど、地域の交流の輪を広げていった。

ところが、1981 年に入って、ジャマイカ共和国政府が右旋回に触れ、それに呼応して、ベレヴュー病院でも、急進的精神医療に対する揺り戻しがおき、患者をできるだけ病院外に出さず、地域医療への係りを取り除く動きが急速に強まった。FWH が作り上げた〈心理歴史誌的短期心理療法〉の雛形としての社会劇作成とその上演による患者自身のための（地域コミュニティを志向した）集団療法は結局ベレヴュー病院から取り除かれることになってしまったのだ⁴⁾。揺り戻しの原因の一部には、FWH の強烈なラスタファリ運動擁護の姿勢、すなわち、ボブ・マーリーに代表されるように、ドレッドロック型の髪、つまり髪を切ることを忌み髪・髭を長く縮れ編み下げる出で立ちを同医博自らも装着する、等の強い提示姿勢があった。そして、宗教的儀式の必須要素という観点からではあるが、ガンジャ（インド労働移民からジャマイカに定着した大麻を指す俗語）愛好のラスタファリ運動を世間のありがちな批判から強く擁護した。同医博もドレッドロック型の髪をして病院内や街路で活動していたのであった。彼は Our own madness という表現句を使い、一般の常識人に戸惑いを感じさせたわけだが、意に介せず、自分自身も気が触れた者なのだと自己提示をおこなったのだ—Chief Madman とか、Dr. Dreadlocks とか、自称他称されるようになったのだった。1983 年には、FWH が 1975 年から行っていたラジオによる精神科相談番組も廃止されることになってしまった。

こうした揺り戻しの後、FWH は、私的精神科相談機関で活動を続け、また、ウエスト・インディーズ大学医学部精神医学科の連携講師となり新たな活動の場を広げた。2000 年に同正教授となり、2010 年 7 月に名誉教授となっている。この間、PCT を方法的に固め、著作に纏めている。2007 年より、同医学部の Executive Director Caribbean Institute of Mental health & Substance Abuse を続け、2010 年からは私的に設立した機関で、小学校児童や高校生サッカー少年団に対して PCT を応用するなど、精神医療や教育に係わる活動を行ってきた。



図 1. F. W. ヒックリング医博（2020 年 2 月 12 日 撮影筆者）

3. 〈心理歴史誌的文化療法〉PCT への歩みと特色

—文化精神医学革新者 F. ヒックリングの重要な転換点で発露された重合身体性

〈心理歴史誌的文化療法〉の形成前期には 1970 年以降の FWH の医学以外の活動に関連した他者からの影響があるが、とりわけ、転換点となった 1977 年ころに同医博がベレヴュー病院で試行・彫琢した〈竹劇場〉Bamboo Theatre の実践や〈理由づけ〉の集団過程の形成の試みが、同療法を確立する転機となった。それが近年、英国へ移住し精神病院に入ったジャマイカ人を扱い、あるいは、第一世界であるカナダモントリオールで同療法を試行するなどの試みを経て、PCT というかたちでさらに体系的に整ってきたわけである。

彼の PCT の特色となっている「歴史誌的」分析方法は、大学病院インターン研修時代の出会いに発していた。1969 年に FWH はウェスト・インディー大学医学部課程を修了し、同大学病院でインターン研修に入った。その直後に、たまたま患者として入院していたゴヴェイア Elsa Goveia に出会うことになった。一元タガイアナ出身（ポルトガル系とアフリカ系の出自、1925 年生まれ）の彼女は、ロンドン大学で歴史学を修め、1950 年同大学ウェスト・インディー分校で教鞭をとり、1980 年死没するまで同大学で教えた一女性初の教授となったこの人の死の床をのちに FWH は医師としてみとっている。彼女は、歴史誌史料編纂研究方法論にもとづき、19 世紀末までのイギリス領ウェスト・インディー諸島の歴史、とくに奴隷の社会的状況の記述・研究を行っていた。彼女と知り合った FWH は、促されて彼女の本を読み、ウェスト・インディー諸島アフリカ系奴隷について長い歴史的スパンの中で捉えていく方法について目を開かれた。ラスタファリ運動への関心やエジンバラ滞在中の 1972 年ころから同諸島マルティニーク出身の精神科医 F・ファノンへの傾倒をみせていたが、歴史誌史料編纂研究にめざめたことによって、その後に彼が手掛けた集団精神療法の背骨となる方法を開拓することができたのである。

歴史誌史料編纂研究方法とは、より詳しく言えば、歴史誌史料資料を用いて資料文書集として区分整理し、そこから歴史をいかに捉えるかを構想する〈歴史についての哲学〉という側面をもつ、いわばメタ歴史学ともいえる。そして、この方法によって、歴史の各時代の人々の信念、世界観を把握、その時代の社会の動態と次の変化の足跡を総合的に理解しようとする。FWH がこの方法を下敷きにし、社会史家でありジャマイカ農村で聞き書きによる社会史研究をおこなった Erna Brodber（小説家としても著名）の手法に示唆されつつ、ジャマイカの人々のエスノヒストリーによる逸話の資料を療法試行に加えるやりかたを導入した点があり、ジャマイカの歴史と現代を背景にして療法を行う FWH の独自の方法となった。患者たちの記憶に残った経験が逸話というかたちで語られる過程を FWH はエスノヒストリーの具体的語りの場として重視した。参加者の身体次元の具体的記憶を引き出したのである。それらの逸話群のなかに集団全体としての集合的歴史記憶が凝集すると考えたのである。歴史誌史料は、心理歴史誌史料というべき逸話記憶に横たわる集合的心性を媒介にして得られることになるし、ローカルな民族集団の文化をなすのがエスノヒストリーであるので、〈心理-文化〉の様相を集団事態での療法で扱うことになる。そこでは、学者等の本や文献を重視するのではなく、人々の口承の語り合いが全面でてくることになる。このように考えた FWH は、1977 年から企画しはじめた集団療法のなかで社会劇を作成上演する試みを、1978 年の初頭、ベレヴュー病院で開始したのである。

ジャマイカの人々全体を歴史的にながいスパンでとらえることが現在の精神医療に必須と自覚した FWH は、つづいて地域精神医療の実践にむかう志向を高めることになる。導き手になったのはイン

ターン中に病院で知り合った精神科医ボブルン Michael H. Beaubrun（ウェスト・インディー諸島グレナダ出身の黒人系として英国で精神医学を修め、ウェスト・インディー大学精神医学で初めての教授となり、総合病院のなかに精神医療ユニットを設立発展させた）であった。彼を通して FWH は地域に目を配る医療に学ぶようになり、彼と連携する精神医療チームの医師らと一緒に活動するようになった。研修医のときから精神医学専門医になる途が開けていき、ボブルンの推薦で FWH は、1972-3 年にエジンバラ大学病院で心理学的精神医療の専門研修をすることになる。ボブルンに導かれたとはいえ、FWH は、F・ファノンの著作にも導かれつつ、ボブルンの地域医療の視点をさらに越えていく。—ジャマイカの歴史全体を植民地主義およびポスト植民地主義枠の中で大きく捉えながら、黒人系ジャマイカ人の精神疾患には植民地主義時代以降も続くポスト植民地主義の全体的歴史的苦境が背景要因となっている点をまずみなければならないとし、実証的精神医学的研究を併せて行うようになっていったのである。ジャマイカ人民国民党の指導者で 1972 年首相にもなったマンレイ Michael Manley の政治思想からも FWH は影響を受け、社会全体状況のなかで人々の治療に係わる医療実践を展開していった。

こうして、FWH が開拓した芸術療法を組み合わせたローカル文化地域精神医療の背骨には、脱植民地主義を標榜した黒人主体の（反西欧）新精神医学が必須となったのである。

PCT の歩み・促進に関しては、ベレヴュー病院で旧来の 1950 年代の作業療法のやりかたを改革・展開したことも関与している。—これには、FWH とキューバの精神科医たちとの交流が大きなきっかけとなっていた。

最初の機会は、1975 年、ジャマイカ国立舞踊劇団のキューバ公演に舞台主任として随行した時に訪れた。ハバナ精神医学研究所を舞台関係者として寸時訪問する機会をえたのである。1977 年になると、精神科医としてラテンアメリカ精神科医師連合年次集会に政府派遣されることになったが、開催会場はハバナであった。今度は精神科医として同研究所をおとない、所長および元はジャマイカ出身の副所長に紹介される。1977 年から同研究所がベレヴュー病院に定期的に出向し、栽培の技やアート工芸の要素をとり入れたより新しい作業療法の導入展開支援の取り組みが始まった（キューバの精神科医の出向支援は 1980 年まで続いた）。

ハバナ精神医学研究所は 7 千床をもつ大規模病院だったが、農業の作業療法が行われ、100 エーカーものバラ園が入院患者によって造園されていた。その作業療法では循環的な会合と土地の背景の文化を生かした文化療法的な作業が行われていたのである。この点はベレヴュー病院で FWH が手がけていた試みと呼応するものであり、ヒントとなった、ベレヴュー病院では、10 エーカーほどの農園で患者たちがほうれん草を栽培し、また、ジャマイカ料理カルルーに必要な野菜を近郊圏内で供給するほどにまで農業療法をうけた患者たちが栽培規模を伸ばし、さらには患者たちが施す鶏飼育で同病院内の鶏料理が賄えるようになった。こうして患者が栽培や飼育のわざを身に着け、また、アート・工芸のわざをふるう要素をとり入れた新しい作業療法、患者の身体性を引き出す療法が具体的なかたちをとっていったのであった。

このようにして、1977 年が転機となり、FWH は、作業療法を展開拡大したが、これは PCT の実質的な始まりとなった以下の 1978 年初頭の劇中心の集団療法の連携前景となったのである。

PCT では患者や医療スタッフその他が参加して劇の台本を合議で決め、そこに音楽演奏と歌・踊り、詩朗読などをふくめた芸術療法的な上演が行われる。1970 年代からジャマイカで歌やレゲエ演奏等をもりこんだ大衆劇がさかんとなり、FWH がそれに熱中し、自身が舞台主任として係わってきた経緯が

あった。彼はそこに黒人系ジャマイカのアイデンティティ再構築のよすがとなる心理療法的過程があらわれているとも捉えていた。当然、FWH の PCT に大衆劇的な芸能を組み込む展開が自然にあらわれていったわけでもあるが、1977 年に FWH がドイツでオペラ等の上演芸術を集中的に観て感激したことも、同年に劇上演のかたちで集団療法を始めた直接のきっかけとなっている。—ジャマイカ国立舞踊劇団の舞台主任は 1977 年のドイツ訪問公演を最後に退いたのだが、そのときにこそ、FWH が西欧の総合劇場芸術をもっとも印象的にうけとめる機会がめぐってきたのである。そして芸術療法をひとつのモデルとしてふくんでいる PCT の重要な部分に、同様に音楽・歌・踊りを総合にくみいれたアート劇を配置しようと決意したのだが、ジャマイカには独自の音楽や歌、踊りがあり、近年とくに盛んに上演が行われていたので、ジャマイカ色の強いアート劇作成の構想がふくらんだのである。実際、PCT を実質的に進めていく過程で、患者とともに参加する看護助手たちやソーシャル・ワーカーたちに踊りや歌、劇を習わせる必要を感じ、FWH は以前係わっていた国立舞踊団の協力をえて彼らたちに 12 週間の期間で手ほどきをしてもらう運びとなっていた。

上記の点からも、FWH の PCT 展開にとって、1977 年がおおきな転機となったといえるのであるが、ここで注目されるのはジャマイカに特有の身体性を重視し、その基盤で重合的に繋がって盛り上がっていく熱中方式である。

PCT を組み込んだ集団過程で重要なのは、集団としての心的中心求心性をかためていくことだ。一患者・医療スタッフ・その他の参加者ができうる限り垂直的ヒエラルキー関係を離れ、作劇をしていく過程で互いの見解や受け止め方の違いをお互いに合議し、それを繰り返し重ねることで互いの違いをうめ、また、違いを尊重しつつ共通の志向を育て、集団としての心的中心求心性をかためていくのである。FWH はこの繰り返しかえしの合議のことを〈理由付け〉と呼び、それを繰り返して回していくことを〈理由付けサークル〉と名付けている。

実は、この〈理由付けサークル〉は、発足まもないジャマイカの音楽バンド「第三世界バンド」The Third World Band と FWH との係わりのなかであみだされた手法であった。前述のドイツ訪問公演からの帰国直後、同バンドのマネージャーから協力を要請され、FWH はこのバンドに活力をつけ将来の活動を方向づけるため、自分の演劇上の腕前と FWH 流精神医学に係わる心理学的腕前を振るうことになった。6 人のバンドメンバー（そのうち、一人は国立舞踊劇団に以前所属していたドラマーで面識があった）と毎日のように会って、合議を重ね上記の〈理由付けサークル〉を実行する運びとなった。そして、世界に公演に出かけるバンドの姿を共に描きイメージしていった。その合議の繰り返しの過程で FWH は台本を作り上げていった。—自分のバンドの名である第三世界とは何を意味するのか、ジャマイカのバンドであるということはどういうアイデンティティをもつことなのか？ 各メンバーは、自分のことを口承語りした。自分のエスノヒストリーを語ったのである。とりもなおさず、これは FWH が志向した口承による心理歴史誌編纂の作業にほかならなかったのである。バンドメンバーたちと FWH は心理療法の過程に入り込んでいったのだ。これによって集団の気持ちがひとつの中心へとむかっていった。そして、結果として、レゲエ音楽と詩の詠唱、現代ジャマイカ独特の踊りが融合したバンド演奏上演ができあがり、それは“Explanitations”⁵⁾ すなわち、革新的上演経験となって実現したのである。FWH は習作として詩作を 20 年来ずっとしてきたものの、今まで公に詩を発表することはなかったが、このバンドが歌う歌詞に自作の詩をたっぷりとそそぎこみ多大な貢献を行ったのであった。

こうしてみると、やはりまさに 1977 年にこのバンドとともに実験的に PCT の先駆けを実行していた

といってもよいのである。そしてやはり、レゲエ音楽と共振するようなジャマイカの重疊的身体性に浸るなかでの合議到達という特徴がみられる⁶⁾。

4. 結語

FWH が開拓した PCT は、一面では芸術療法からの借用を核とする集団心理療法として理解できるところがある。とはいえ、黒人系ジャマイカ文化と歴史を刻みこんだ独特の集団心理療法という特色を持つのが PCT なのであり、PCT が成立した過程で黒人ジャマイカ、さらにはカリブ域黒人文化と歴史が深く練り込まれている。そして、心的外傷性〈奴隷〉症候群がポスト植民地体制下の黒人系ジャマイカ人にいわば眠っている現状を明るみにだし、500 年以上の長きにわたる人種主義の桎梏を解き放つために、心理療法介入者の導きもうけながら、心理歴史誌的図表を PCT 参加者全員が体得的身体的につかみ直し、集団全体の心的中心求心性がいやましに高まって、参加者全員が未来にむかえる新しい自己アイデンティティを再構成していくのである。

PCT が最も成功した場合には、心的中心求心性の強度が強まり、例えば 20 年間、緊張病症状で固まっていた患者が、自ら発言し劇上演にも参加し踊ったりする回復現象が見られるのである (FWH, 2007: 116-7)。このような成功を呼ぶためには集団療法過程における参加者の身体性からくる熱中状態が必要なのだが、それがなぜ可能となるのだろうか—1 つの要因は、本稿で述べたような PCT 成立時の多様な身体的表現の絡み合いという黒人系ジャマイカ特有の、繋がり合う流れ合う身体交流という基盤が横たわっているからだと考えられる。FWH が開拓した PCT のこの特色こそを押さえるのが重要である、というのが本稿の趣旨である。

注

- 1) FWH への筆者によるインタビュー内容参照のほか対応部分について、FWH, 2007 *Psychohistoriography: A Post-colonial Psychoanalytic and Psychotherapeutic Model*. Kingston: CARIMENSA, Univ. of the West Indies. をはじめとして FWH の論文対応部分を適宜参照した。文献の対応頁数をそれぞれ掲載提示すると煩瑣となるため、特に言及すべき例外を除き、本稿では余白節約のため提示しない。更に研究ノート制限字数のため、文献表・科研費関連謝辞を全削除 (拙著「ジャマイカの文化精神医学革新者 F. ヒックリングと心理歴史誌的文化療法について—参与経験をふまえて—」東京通信大学紀要 6 号 2024 年 3 月, pp: 56-69, の文献表謝辞参照)。FWH が社会精神医学から文化精神医学に拡大していった経緯にみられる文化精神医学の意味領域、その革新の意味、および、エスノヒストリーを引き出し文化療法と位置付ける PCT の〈文化〉の意味、文化的身体性について、本稿で掘り下げて論ずる余白がなく、別稿に委ねたい。
- 2) 筆者に語ったことだが、大学医学部学生時代の前半は、精神医学志望というわけではなく、解剖学を修めつつ、外科の宿直研修等をしていたが (ロンドン大医学部聖トーマス病院でも解剖学の専門訓練を受けた)、外科専修を終了前後の時期に、自分の親戚等から改めて母方祖父の事を聞き、精神科の黒人医師として自己形成した祖父に自分を重ねあわせたところがあり、精神医学のコースに進んだと語った。一なお、この祖父の時代は、依然として黒人出自のために病院上級管理職医師にはなれず、院長、部門長等の永久在職権をもつのは白人医師であった。精神科専門医ではないが白人ゆえに部門長になっていた白人医師に、この母方祖父は、精神科医療を実質的に教える立場を長く続けていた。しかしながら、結局、専門性が自分のほうが高いのに従属的処遇に甘んじる立場に嫌気がさして、自分から退職するという反抗的行動をとったのである。それからほどなく、第一次大戦が勃発し、戦争対応のため、英国から白人医師を植民地ジャマイカに派遣する余裕がなくなった。この事情で、黒人の医師が白人医師と実質同等の診療権をもつかたちで、病院に実質的にはじめて採用される運びとなったのである。当時の精神科病院の場合には拘禁医療、即ち閉鎖病棟に拘禁状態で閉じ込めておくとい

う監獄医療様態がたけなわであり、そうした拘禁状態に精神病患者を置く医療という西欧的精神医療がジャマイカ独立前の時期まで継続していたのだ。ただし、ジャマイカ共和国成立後から 1980 年代までの時期では以前の植民地型医療の旧弊を破り、革新的政府による新しい気風とともに新医療体制の形成が総合病院で試みられる時代となった。精神科医療の場合、拘禁状態から患者を解き放ち、地域のコミュニティの文脈の中で社会精神医学的な治療を試みる気風が生じ、さまざまな新実践が行われたのだった。特に、脱植民地視座に立った改革全般を進める機運が急速に広がったのだった。

- 3) J・ウリ『コレクティブーサン・タンス病院におけるセミナー』(多賀茂・上尾真道訳)月曜社 2017 年。FWH が影響をうけた F・ファノン³⁾はフランスでの精神医学研修の一時期の 1952 年、サン・タルパンの精神病院で F・トスケイエスのもとで学んでいた(Sikuade, A., 2012)。トスケイエスはスペインのフランコ政権に抵抗して死刑宣告を受け、その後フランスに逃亡して精神科医をつづけた経緯をもつが、彼のもとで、J・ウリや F・ガタリが研修をうけた時期がやはりあり、そこからウリの〈コレクティブ〉の思想が展開され、また、ガタリの機械状無意識の概念をふくむ非シニフィアンの記号論の一部の発想とも結びついていると考えられる。こうした意味で、FWH のファノン経由の構想とウリの構想を比較してみる必要もあろう。
- 4) 〈社会劇〉は V・ターナー⁴⁾が 1950 年代、アフリカ・ザンビアの夫方居住母系制のンデンプ族社会で子が成人に達する時期、循環的に生じる夫と妻方親族間の葛藤を調査研究して構想した社会人類学的概念 (V. W. Turner *Shizm and Continuity in an African Society*, Manchester, 1957)。本稿の文脈では、療法参加者間の社会的政治的文化的差異からくる葛藤を扱う劇作成と上演を集団療法の中で行う、という意味の社会劇である。とはいえ、社会の現実事態で生じてくる衝突の連関が結局は象徴化した劇形式の系列に集約され修復儀礼へと至る点に注目したターナーの着想と FWH の社会劇を関連づける余地があると筆者は考えている。
- 5) FWH による新造語。他にも、Madnificent など語呂合わせをつかった新造語があり、その一部を自著の論文表題にも使っている。
- 6) なお、ジャマイカのラスタファリ運動の宗教的儀礼では、レゲエ音楽を奏で、合議を重ねるうちに深い合議の継続状態に達し、深い深層意識状態による洞察がえられることがある。そうした状態における洞察のことを overstanding という。この語は understanding がもっとも深まった状態を表す。FWH et al 2010 の p. 141 では、FWH の〈理由付け〉は、この overstanding を齎すラスタファリの方法を集団療法過程に適応したものであると指摘されている。上記 3)、4) の註と関連させて考察しうる可能性がある。

FWH, J. Guzder, H. Robertson-Hickling, S. Snow, & L. J. Kirmayer 2010 "Psychic Centrality: Reflections on Two Psychohistoriographic Cultural Therapy Workshops in Montreal," *TRANSCULT PSYCHIATRY*, 47: 136-158.